



今月の御聖訓



惟一なれども十方の  
 諸天此れをしり給ふべし。  
 露を大海によせ、土大地に  
 加フルがごとし。生々に失せじ、  
 世々にくちざらむかし。

惟一なれども十方の  
 諸天此れをしり給ふべし。  
 露を大海によせ、土大地に  
 加フルがごとし。生々に失せじ、  
 世々にくちざらむかし。

【富木殿御返事 九六八頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講講話「生命の尊重」ということ	菅野憲道 2
天地つかの間〔その③⑦〕	成田詳道 8
法の巻④「鶴丸・亀甲・松竹梅〈続〉」	興風通信 9
読書案内『人の砂漠』	松田銘道 11
忘れられた総講頭〔三〕	槻木守三 12
ちょっと寄り道③⑦〈諸天のご加護か〉	森田観道 18
恵日だより	19
六月の行事 水無月詠草 恵日俳壇	

# 巻頭言

## 日蓮論

菅野 憲道



「日蓮は民間無名の一平民僧でありました。しかるに彼が攻撃の対象とした仏寺並びに高僧達たちは、北条一門を始めとして有力者の尊崇を受け、世に時めいた者たちであります。しかし、日蓮は競争心や嫉妬心から、彼らに向って論難折伏を為したではありません。彼は社会的に有名な人物に喧嘩をふきかけ、それによって自己の売名を計るような小人物ではありません。あるいはまた、ひそかに権力者に通じ、時流に乗って、他の学者を陥れることを商売とするような、陰險な策士でもありません。日蓮は喧嘩を好んで喧嘩をしたのではない。彼は真理を愛したが故に、真理の敵に向かってやむを得ず論難を加えたのです。」

「日蓮は自己の信念の基礎をば常に経文に求め、自己の言説をば、いちいち経文に裏打ちしました。日蓮の文章言論は、経文によって満たされています。これは自己の言を装飾する為のペダンチックな引用ではありません。自説の貧弱なことを隠蔽するためのカモフラージュでもありません。ある意味では日蓮に自説というものはありませんでした。彼は経文にある事のみを語ったのです。『日蓮の言は日蓮一個の私の言ではない。これは経文の言である。』この事実が日蓮の言論にあの強さを賦与した根本の原因です。」

これは経済学者・矢内原忠雄（キリスト者）の『余の尊敬する人物』（岩波新書）からの引用である。内村鑑三（キリスト者）の『代表的日本人』（岩波文庫）や曾我量深（真宗学者）の『日蓮論』（同全集）もまた、宗祖大聖人の信仰と人間性を深くとらえていて、おおいに啓発されるものがある。ところで、大聖人門下を自称するいまの宗門・教団や僧俗に、どれほど宗祖への深い理解があるのか、はなはだ疑問に感ずることがある……。

我々の日蓮論が、不信の輩とよぶ彼らの理解に、本当に劣っていないかどうか、検証を忘れないようにしたいものである。

お講講話(要旨)

拝読御書 「可延定業御書」(全集九八五頁)

# 「生命の尊重」ということ

菅野憲道

## 《命は一身第一の珍宝》

『可延定業御書』は、富木入道殿の奥方から、病気で臥せているとの報せをうけ、大聖人が病に対する心構えについて、また命の尊さについて述べられた御書です。

「命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれをのぶるならば千万両の金にもすぎたり。」(全集九八五頁)

もし一日でも生命を延ばすことができるなら、それは千万両の黄金にも代えられないほどありがたい事だということです。また、たとえ国王の世継ぎとして生まれても、若死してしまっただなら何の意味もないとも仰せられ、命こそが大切で、何としても治療に専念して健康を保つように仰せられております。

この御書で大聖人は、生命や健康ということの大切さを述べ、重ねて、

「身の財をだにをしませ給わば此の病治しがたかるべし。」

(同九八六頁)

「あらをしの命やをしの命や。」(同)

等と申されています。

## 《正反対の意の御書の存在》

ところで、健康が第一であることは誰でもわかっていますが、この御書の文言を必ずしもそう単純に解釈するわけにはいきません。もっと本質的なところから理解していかなければならないと思います。それは、どういうことかと申しますと、これとは別の御書に、このような趣旨とは違った御教示も多く見られるからです。

「とにかくに死は一定なり。其の時のなげきはたうじ(当時)のごとし。をなじくばかりにも法華經のゆへに命をすてよ」  
(「上野殿御返事」全集一五六一頁)

「命限り有り惜むべからず。遂に願ふべきは仏国也云云。」  
(「富木入道殿御返事」同九五五頁)

等と、命を惜しんではいけないと書かれていて、一見すると、矛盾した説が述べられていることがあるからです。

このような場合、御書全体、すなわち大聖人の仏法を体系的に学んでいないと、混乱します。そのうえ、自分に都合の良い御書

の断章に偏執したり、一部の切り文を金科玉条として振り回せば、その解釈はいろいろで、さまざまな似非日蓮信仰が出てくることになるでしょう。

今まさに宗門や学会・顕正会等の分裂と混乱の原因の一つが、この法門的な混乱、教学・思想的な混乱にあるわけです。

たとえば日常生活でも、子供の教育についても、もっと厳しくという場合もあれば、逆に優しくしなさいという時もある。これらはみな時と場合によって違います。要は、その子をかかえに立派な大人に成長させるかが問題であって、そのために頑張れと励ましたり、逆のことをいったりする。正反対のことをいっているが、結局は、



子供を褒めるか叱るかは、時と場合による

根底に一つの道筋があると思うのです。

大聖人の仏法においても、御書の中に、一方では「教主釈尊を本尊とすべし」と説かれながら、別の御書には「法華経の題目を本尊とすべし」とも述べられている。また片方では「智者・学匠となつてなにかせん」といいながら、「行学絶えなば仏法はあるべ

からず」とも仰せられております。

物事は、一つのことについて右側からみていう場合と左側からみて言う場合があり、それをもし片方だけの見方に固執してしまふなら、ひどく歪んだ物事の見方になるでしょう。

### 《総別ということ》

ところで、本宗の歴史において、宗開両祖已来の信心を余事を雑えずに正しく継承してきた象徴として、貫主上人が敬われて来たことを否定することはできません。しかし、それをもっと広く言えば、正しい信心を持っている人はみな南無妙法蓮華経の当体だということでもあります。

「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし。仏は用の三身にして迹仏なり。」(全集一三五八頁)

と『諸法実相抄』にあるように、信の上にはみな南無妙法蓮華経の当体蓮華の仏様なのです。その一番の手本が日蓮大聖人で、大聖人が仏であるということは、同じように日興上人、日目上人、已下代々の上人、正宗正信の僧俗はみな南無妙法蓮華経の当体蓮華仏であり、みな本仏だということになるのです。

しかし、信の上の内証の一边を強調しすぎると、今度はろくに信心もないのに、慢心をおこして自分達こそ法華経の行者だ、などということになって、我慢偏執の姿に陥りますから、どこまでも大聖人唯一人を末法の主師親と立て、帰依の三宝尊も、御本尊と大聖人と日興上人を三宝とし、それ以上の所には広げていかないのです。

ただし、総じていう場合、すなわち広義においては、貫首上人はじめ宗開両祖の末弟たる僧侶もみな僧宝の一分ということにな

ります。さらにもっと広い意味でいえば、法華経を信心している皆さん方も在家の身であっても、他宗他門の人を教化折伏する姿は、その人にとって僧宝の役割を果たしているのですから、僧宝の一分としての役割が無いわけではありません。

ですから、総じての話か別しての話かで、立て分け方がまったく違ってくるのです。仏様の側から話しているのか、それとも衆生の側から話しているのかを立て分けないと大変なことになります。われわれは、逆説不信の衆生の側にとって、信心修行を立てて行くのであります。

現在はその立て分けができずに、ある時は創価学会員全員が法華経の行者になってみたり、ある時は法主が現時における日蓮大聖人で御書直結は謗法だ等と愚かなことを言いだすのです。これらのことは大聖人の仏法に対する無知からおこるのです。このことは、『法華取要抄』に、

「所詮所対を見て経経の勝劣を弁すべきなり。」(全集三三三頁)と、「所対」、すなわちどの次元で物事を論じているのか、何に對していわれているのか、それによって解釈が違ってくると思われています。

御書の文々句々も、同様に、勸誡の二門、与奪の立破、総別の二義、傍正の両説などを考えた上で捉えなければならぬのであります。自己の知識に任せて断章を解釈すれば、曲解してしまうことが多いのであります。

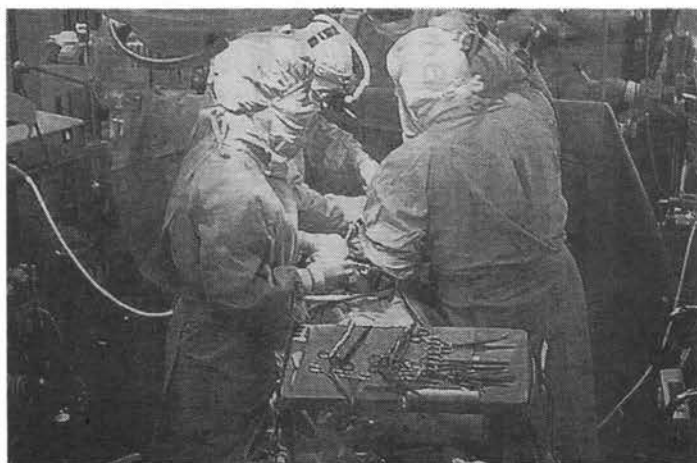
《矛盾の根底にある意味》

では、大聖人の生命観の基調がどこにあるのか考えてみたいと思

います。

最近、脳死による臓器移植が行われ話題になっております。これも「生命の尊重」という旗印のもとに、医療技術の進歩が計られているのだと思います。

しかしこの問題は、ちょっと考えただけでも、単なる医療技術の問題だけではないのです。たとえば臓器の売買の問題です。現実にインドとか、南米の方では、小さな子供や赤ちゃんが誘拐されて、その骨髄とか臓器が売買されていることが報道されていますが、高度医療というものは先進国の金持ちだけが利用できる、開発途上国の貧しい人は犠牲になりかねない構図があります。またそのコストも膨大なもので、保険制度ではまかない切れず、貧富の差によって医療の恩恵の格差が広がります。医療技術が進歩すれば、そこに、倫理的な問題、社会的な問題がたえずつきまとうのですが、医療の現場にいる人たちは、そういうことはあまり考えません。また、人間としての情緒や感情や誇り等は問題でなく、とにかく肉体的な機能が維持されれば良い



臓器移植には、まだまだクリアすべき問題が多い

命の尊重・個人の尊厳性を訴えていかなければなりません。しかし、一人ひとりが自分の人生を考えてみた場合に、その一番大切な命がみな最後にはなくなってしまうのも現実です。

例外なく必ず死が訪れて、愛惜し、いとおしんだわが命が跡形も無くなってしまふ……。その限られた命を、どのようにとらえ、どのように生きるかということによって、生きるという事も、死の意味もだいぶん変わってくるのではないのでしょうか。

《野村監督の人生哲学》

先日、阪神タイガースの野村監督が、キャンプ中に選手を指導する姿が紹介されていました。

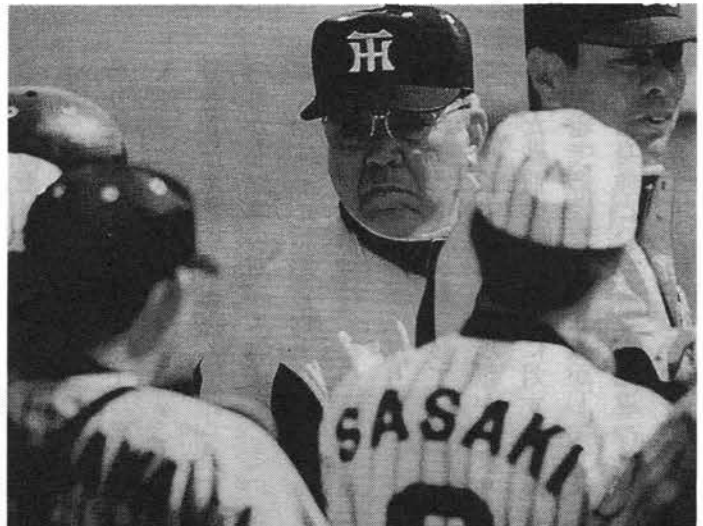
監督は、キャンプの練習後、選手にいろんなことを講義していたのですが、その半分ぐらいは人生哲学や、野球に対する選手の意識改革が主だったようです。

たいいていの選手は、タイガースの選手というだけでもてはやされて、高収入も人気も約束されているのですから、それだけで満足してしまうでしょう。その意識を改め、野球にかけるひたむきな情熱とか、ハングリー精神に変えていくためには、まず選手の持っている人生観や哲学から変えていかなければならなかったということでしょう。

その野村監督の講義中、瞬間ですがノートをズームアップしてとらえておりました。で、びっしり書かれたノートに、まず「人生」と書かれているのが見えました。そこには、

「人として生まれる

人として生きる



自分を生かすことは周りの人も生かすことになる

人を生かす  
人を生む」

と書いてあったのです。おそらく「生きることの意味」について講義をしていたのでしょうか。

考えてみると、我われもただこの世の中に生まれたただけであって、生きるという段階まで到達していないかも知れません。生きるということは、自分が自分の人生を文字通り主体的に、理想なり、目的

なりをもって生きることが、生きるということだと思います。それを、食べて眠て、呼吸して、排泄してということだけでは、自分の本能のままに流されているのですから、犬や猫が生きているのと大差ないことになります。

しかし、さらにその上に「人を生かす」と書かれていましたから、生きるということは、自分を生かしつつ、周りの人までも生かしていくことなんだと、野村監督は言おうとしていたに違いないと思います。

おそらく自分たちが一所懸命野球をやることにおいて、その姿が最終的には周りの人までも生かすようになる、と言いたかった

と見がちです。ある意味の技術者ですから、技術の可能性をどこまでも広げていきたいということもあるでしょう。

さらには、クローン技術とか、遺伝子そのものを操作する技術などがどんどん進化していったら、今までは想像もつかないような深刻な問題が起こってくるものと思います。ですから、こういう問題は慎重のうえにも慎重を期して進めていただきたい。技術的に可能だから実施するというのでは、取り返しをつかないことになりかねないと思います。

もし医学における生命観が、人間の生命を極めて即物的に捉え、生命も機械のように故障したら修理すればいい、壊れたら複製したらいいというような、極めて素朴な生命観では、必ず問題がおこると思います。

最近では生命観や価値観、人生観を打ち立てて行くべき宗教や哲学が非常に衰退して、即物的な肉体という機能の面だけの生命観が強調されますが、その風潮の背景には、人間は必ず死ぬと言いうことを忘れていることがあると思います。

昔は誰でも人が死ぬことは当たり前前で、いずれ自分も死を受け入れざるを得ないことを覚悟していたのですが、今の世の中では、死は絶対あってはならないものとして、断固として死を拒否しようという人が多いようです。しかし、たとえ健康な人であろうと、死は避けて通ることはできません。

医学がどれほど進歩しようと、一人として死から解放されたことはありません。ただ少々死期を先送りし、死の現実を目隠しする役割を果たしてきただけでも言い得るでしょう。

そしてまた、今の宗教もそれらから目をそらせる方向で機能し

ているようです。聖教新聞などを見ても、どこにも死を正面から受け止めた記事などありません。これはほかの宗教でも一緒だと思います。しかし、我々は誰もが「老・死」を避けては通れないのですから、その現実から目をそらし、一時の愉悦にふけるのがいいのか、それとも、人生の現実を直視して、そこから自己の人生を主体的に生きようとするのがいいのか、よく考えなくてはならない問題です。

仏教はもともと生死一大事といってこの人生の現実をしっかりと直視し、ありのままに認識するところから智慧が生まれてくるというものです。生死を正面から捉えていった時に初めて、生きるという意味も分かってくるのではないかと思うのです。

こうしたことを考えるヒントとして「不惜身命」という言葉があります。これも、かつては多くの人が、道を求めることにおいて、また大義や理想を奉ずることにおいて、身命を賭するということが、当然のこととして語られていた時代がありました。

しかしいまの日本では、かつての戦争による苦い経験から、国家に対する不信感とともに、滅私奉公とか、大義に殉ずるといような犠牲的精神は、結局他人に利用されるだけの愚かな行為であると考える人が多くなりました。戦争であまりに生命が軽く扱われたことへの反動として、他人はどうあれ、自分が生きのびることが一番大事という思想が広まったように思います。また、そうした戦前の国家権力に対する抗議としての、生命の尊重・人権の尊重であったような気がします。

不惜身命ということが間違った思想や指導者に利用されると非常に危険ですから、そういうものに対して我われはどこまでも生

に違いありません。仮りにタイガースが優勝したら、関西中が元氣になって、経済効果だけでも何百億円もあるといわれているのですから、まさに彼らが自分自身を生かすことが、周りの人まで生かされる状況があるのです。

自分が生きるということは、非常に深い意味があつて、それが自分だけにとどまらず、周りの人にも深い影響があるのです。

病院で寝たきりの老人でも、愚痴ばかりこぼしていたら、自然に周りの人まで元氣がなくなつてしましますが、たとえ病で肉体が朽ちようとしている時でも、最後に残された命を希望を持って、さすがしく生きるならば、周りの人まで大きな希望が湧いてくるのです。皆んな誰でも年をとつて死ななければならぬことは分っているけれども、いよいよ老衰したらどうなるのだろうか、臨終の時はどうなつてしまふんだろうと不安に思つて居るのです。誰もがその手本になれるわけですから、もし誰かが安心と法悦の姿を示せば、その周囲の人はみな救われるのです。それと同じことではないかと思ふのです。

さらには、自分が生きるといふ努力、あるいは自分を生かすといふ努力が、必ず未来にも繋がつていくのであつて、死んでおしまいということはないのです。歴史を見ればわかりますが、ひとりの人間の生き方が、周囲の人いろいろな影響を与えて、世の中全体が変わつていったということはいくつでもあります。そういうあり方が、結局仏教でいうところの一念三千の法門であると思ひます。

《眞の生命尊重とは》

命を大切に思うことは、単に自分の肉体的な生命だけを大切に

思うだけではだめで、むしろ利己心に流されないようにして、その肉体的な生命をいかにして生かし、価値あらしめ、光り輝かせていくかに、本当の生命の尊重があると思ひます。

ただ健康管理に氣をつけて、だからだら長生きし、最後に延命装置で寿命を延ばすことができたとしても、それだけでは生命尊重とはいえないと思ふのです。

生命を尊重するということは、結局自分の命をどこに生かすかということになるはずですが、必ず朽ち果ててしまう生命を、どう生きて、いかに生かすかという智慧こそが、仏法を学ぶことによつて得られると思ふのです。

「多宝如来の宝塔を供養し給ふかとおもへば、さにては候はず、我が身を供養し給ふ。」(全集一三〇四頁)

とありますが、我われは妙法蓮華經という御本尊を拜して、一所懸命に仏法に供養する、あるいは四恩を報ずることをしているけれども、それらは本当は他人にしているのではなくて、全部自分の一番本質的で尊い命〓妙法蓮華經を供養していることだと申されて居るのです。

「命限り有り惜むべからず。遂に願ふべきは仏国也」ということは、身命を惜まず仏道を求めることによつて、本当の自己を発見し、本当の意味で、自他の生命の尊重に繋がつていくものと確信します。

時間になりましたが、皆様にはどうぞ、健康に留意し、時間を大切に、しかもなおそれらを惜しまずに、信心修行に精進せられますよう、重ねて申し上げて今月の講話といたします。

南無妙法蓮華經

(了)

石原慎太郎知事の、都政スローガンは「はつきりYES、はつきりNO」だそう。なにやら、過疎地の廃校となった小学校で、誰もいない運動場から、教室の中を覗いたような気がした。

教壇の黒板の上か、横には「はつきりご返事。はい、いいえ」と、書かれて久しい、薄茶けたワラ半紙が、さびの出た画紙でへばりついている……。

## 天地つかの間

〔その三十七〕

成田 詳道

もちろんこれは、石原都知事の政治手腕とはなんの関係もない。むしろ新聞はその一挙一動を、好意的な言辞で伝えているようにすら思える。

私はスローガンとはむずかしいものだと感じただけだ。たまさか、その新聞の一面では、同紙の①社名ロゴ、②イメージキャラクター、③キャッチコピーの三

点を公募していた。

お金さえ出せば、一流プロのコピーライターがいくらでもいる。それを一般募集するのは、この手のものが徒手空拳でも、着眼点と感性の働きさえあれば、玄人でも素人でも、大差のない作品が出来る、という証拠だろう。

また「歌は世につれ、世は歌につれ」



せいたくは敵だ！

ではないが、庶民感情は時代と共に、移り変わるといふことだ。

よく知られている諺でも「女子も赤子も」が「猫も杓子も」となり、「甘い物には福」が「余り物には福」となり、今では「残り物には福」と、言われていることでも知れる。

だからタイトルや、スローガンの果た

す役割は、なおさら重要だ。スポーツ新聞の編集などでは、秀逸なタイトルを考えると、賞金が出るそう。確かに駅売りの新聞などは、まず初めにタイトルが眼に飛び込み、そこに手がのびる。

日本国民が戦時中に、教え込まれたスローガンでも「欲しがりません、勝つまでは」とか「鬼畜米英」の言葉は、戦後生まれの私の脳裏にも、まったく無意味なままに、伝え残されている。

さらに面白いのは、タイトルやスローガンを掲げた本人が、ネジリ鉢巻き、おっとり刀で、シャカリキになっている時に、そばでそれを冷やかな眼で、見つめている人種が、必ずいることだ。

先日、ラジオで小耳にはさんだ話だから、記憶違いがあるかも知れぬが、詩人で小説家の佐藤春夫には、愉快な祖父がいたそう。椿山王と号した祖父は「勝つて兜の緒を締めよ」との誠めから、戦時中の惨状を評し、こう詠んだという。「勝つて兜の緒を締め禪も」

締めてますます 息苦しき世の中」

(源立寺執事)

# 鶴丸・亀甲・松竹梅の事(続)

前回、日宣上人のご説法より三祖の御紋について紹介しました。ところが、「目師の御紋の事は明日、明後日何れ両日の中に申し聞かせてござろう」と日宣

上人がご説法をきられたままに、入力の方も終わらせましたところ、「途中半端は困るよ、松竹梅はどうした?」と、催促のような、激励のような、有り難いお言葉を頂戴しました。



日目上人のご紋

「二十二日追加」  
目師の御紋の事。目師の御紋は皆々拝見の通り、松と竹だ。この松と竹は天地の性を受けて、天地の間に生るものだ。

そこで以下、日目上人の御紋について紹介しますが、日宣上人のご説法には松竹梅ではなく、梅が無く「松竹」となっています。理由はわかりませんが、悪しからず。  
\* \* \*

其の天地の間に生るものの頭にして、松は木の王、竹は竹の王。是れ人間夫婦の間に生る子供の嫡子惣領を象取って、仏法の嫡子分たる日目上人の御紋に松と竹を付ける。

しかれば御三師の御紋立ち寄って鶴・亀・松竹となる。何れも目出たい道具だ。日目上人の目(もく)の字が其の目出たいと云ふ時の目(め)の字だ。在家で嫡子惣領に跡をゆづる時、嫁取りあるいはムコ取り姻礼の夜は鶴・亀・松竹の蓬菜を飾り、ヤレ目出たやと悦んであろう。仏法とも其の通り、大聖人の御本願満足して広宣流布の時至れば嫡子分の日目上人一閻浮提の座主と成らせられ、ヤレ目出たきや南無妙法蓮華経と一切衆生一同に悦びざざめく、夫れを表示として御三師の御紋右の通りだ。  
是れ全くあとで拵えて付けたに非ず。各々方が男は自然と鶴の丸を方取り髪を結び、女は自然とベッコウを頭に頂くが如く、無始法爾天然自然の道理にて、御三師云い合わせたる如くの御紋をお付け遊ばされたものでござる。

尚委しくはまたまた  
 明日中に申し聞かせて  
 ござる。昨日両師の御  
 紋の事を云い、目師の  
 御紋の事をば今日へ延  
 ばし、今日も少しばか  
 り云って委しくはまた  
 明日云って聞かせよう  
 とは、どうも講釈師の  
 真似をして跡を引かす  
 ようなれども、其の跡  
 を引く子細はどうぞ各  
 々方を一日も余慶に参  
 詣させたく、勿論参詣  
 が多いとて元より欲得  
 でする説法でござら  
 ぬ。

こう参詣が多いとてこ  
 の方の徳用にもならね  
 ども、昨日、今日、二  
 日参ったから明日は休  
 むと思ふ衆も目師の御  
 紋で跡を引かれ、また  
 明日も参詣する気にな  
 れば畢竟其の人の功德



明治期の常泉寺山門、奥の方に本堂の屋根が見える

徳分と成る事でござるから、そこで講釈師の真似をして跡を引く、皆の衆、明日は当年中の説法の仕舞でござる別して大勢の参詣を待ち入ります。

\* \* \*

以上、二日目の御会式説法です。この年の江戸での御会式は三日間。

・十月二十一日、下谷常在寺、参詣者一三七人。

・十月二十二日、中之郷妙縁寺、参詣者一四九人。

・十月二十三日、小梅常泉寺、参詣者の人数は不明、しかし両日とほぼ同数とのこと。

お速夜の説法はあったのかどうか分かりません。参詣者はそれぞれの地域の方の中には三箇寺めぐって聴聞された篤信の方もおられたようです。

それにしても、引っ張って引っ張って「講釈師の真似」とは、ずいぶん親しみやすい面白い話ですね。気さくな感じのする日宣上人のご説法、江戸の老若男女に混じって聞いてみたい聞いてみたいものです。

(興風通信……「松竹梅はどうした?」)

一九四七年生まれの著者は、二十代の締めくくりとして探し求めた「ルポルターージュ」八編を収録した「人の砂漠」について、「あとがき」に次のように記している。

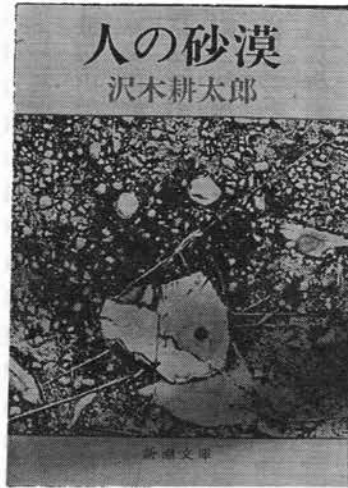
「人の砂漠を歩きながら、ぼくはそこで無数の地の漂流者たちに遭遇した。あてもなくさまよう者がいた。追放の重荷に押し潰されそうな者もいた。王国を求めながらその門すら見つけることができず、砂漠にひとり死んでゆく者の姿を見かけたこともある。遊牧民が広大な砂漠にほとんど無意味な墓標を作るように、ぼくもまた彼らのために石を積みみたいと思うことがあった」

世間とは、一人ひとりの人間が集まっているだけの社会に過ぎない。だが、その人間社会はまた捉えどころのない世界でもある。人びとは「今」をどう生きていきたいのか本当は何にもわかっていない。だが、何かにしがき苦しみがあっても、社会との関わりだけは失うまいと必死になつて生きている。その一人ひとりのものがき苦しみが、様々な人間模様となつて現れ、またいろいろな事件が発生する要因もここにある。

それだけに社会に影響を与えた事件が、人間の生き方について大きな問題を問いかけているとは限らない。むしろ社会の片隅で起きた、哀れさえ感じるほんの小さな事件と思われるものの中に、人と人との関わりについて根源的な問いかけをしていることが多い。

読書案内

松田 銘道



沢木耕太郎著  
『人の砂漠』

新潮文庫  
定価五九〇円

本書に収録された「おばあさんが死んだ」「鏡の調書」の二編を読むと、そのことがなるほどと実感できる。

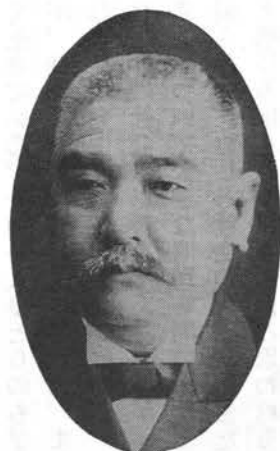
二つの事件は、著者が新聞で報道された記事からふと興味を懐いたもので、七十二才と八十才の老女に隠された過去を丹念に追つて、人の生き方を見つめている。

浜松の病院で栄養失調と老衰で亡くなった七十二才の老女の記事は、普通であれば地方新聞の三行記事にもならないひとつの死に過ぎなかった。

だが、小さいながらも全国紙の社会面で報ぜられたのは、老女宅の奥六畳間から、ミイラ化した実兄の死体が発見されたことによる。全国紙は「ミイラの兄と一年半・老女も餓死」といった見出しを掲げて報道した。しかし、著者はそのミイラだけでなく、ノートに記された英語まじりの奇妙な文字の謎、それに餓死状態でも「他人の世話になるのはいやだ」と、外界を拒絶するその「言葉」から、たんに「老人の孤独な死」と放置できない何か横たわっているのではと、興味を懐いた。

八十三才の老女については、詐欺事件を調べていた著者が、騙した方も騙された方も、あとで笑い飛ばせるような愉しいもので、しかも両者の笑いから「詐欺事件の核心」が現れてくる、そういった類のものはないだろうか、膨大な資料を調べていく中で、「これだ！」と目に止まった記事を追ったもの。まさにその予感通りの芝居が、三年もの長い間岡山で演じられていた。(正覚院主管)

【荒木清勇居士略伝】



忘れられた総講頭〔三〕

槻木守三

\*法論の初陣「倉垣問答」

大阪の北部というよりむしろ、丹波地方に近い能勢の里は、低い丘陵の合間に集落が点在している。近郷には多田源氏の発祥の地・多田荘をひかえているためか、鎌倉時代以来の旧家も珍しくない。この地方は、江戸初期の領主能勢氏によってことごとく日蓮宗に改宗させられた、いわゆる一円皆法華の地としても有名である。

その一郷に倉垣村がある。万葉集にも詠われた歌垣（倉垣）山から西を眺めると中央には千石谷と称する水田が広がって、それをU字に取り囲むように農家が点在、周囲の里山には手入れの行き届いた栗林が多くみられる。どこにでもある日本人の故郷

のような美しい農村である。

歌垣山の麓に居を構える井上條之助家は、代々多田御家人の取締役という家柄で、幕末にはこの地方の郷士をまとめて、禁裏御守衛士として交替で上洛し、勤番に当たっていたことが古文書に見えている。近隣の奥感兵衛家はその本家にあたり、慶応頃には、両家ともに御所警護に勤番しており、奥家にもその鑑札が伝えられている。

その奥感兵衛が御所守衛のために京都滞在中、住本寺講頭の加藤廉三らの教化によって帰依したことが本宗信仰の始めである。それは、明治二年に、奥感兵衛が領主の能勢陣屋に三十両を貸し付け、その金利（毎年千疋）を供養する旨の証文が住本寺に残っていることでも知れる。また、霑師の書

状が数通、同家に伝えられていたことから分かる。奥感兵衛・源之進父子は篤信者であるとともに、井上條之助・條橋父子と並んでこの地方きっての名望家だったように、孫の奥基次郎は明治十二年に第一回大阪府会議員を勤め、同じく井上虎平は郡議会議員をつとめているほどである。

この奥・井上両家の教化により、倉垣の旧家、中西、畑、西田等々、村長や医師などをつとめる村のおもな人々が次々と日興門流の信仰に帰依していった。

おりから明治八年頃になると、信教の自由、すなわち改宗の自由が認められた。そこで井上條橋・奥源之進らを代表として十数軒の家が、同地の日蓮宗妙法寺に対し、たびたび離檀改宗を申し入れたが、妙法寺

側は言を左右にして承諾を拒んだ。そこで翌明治九年九月になって、京都から加藤廉三（五十一歳）と荒木英一（二十六歳）が応援に出張し、あらためて妙法寺を訪問して離壇を申し入れ、本尊論や本迹問題など教義論争がなされたようである。



右：加藤廉三



左：井上條橘（広類房）

これに驚いた妙法寺住職が、檀家が総崩れになるのを何とかくい止めようと画策して起こったのが倉垣問答である。

井上・奥兩人からも、身延門流謗法の破折をうけ、返答に窮した妙法寺日庸は、そ

の後になって井上・奥兩人に対し十四カ条からなる質問状を発している。その文末には次のように記している。

「さては、記し差し出し候事件、愚俗の爲めに承り置きたく、界紙あきの所へ朱書にて両先生へお書き入れ願いたく、右申し述べ度、早々、不一。」

要するに本迹一致の誤りの証拠や不読誦不造像、薄墨法衣の根拠等を、質問事項のアの空欄に書いて返答せよというものである。この質問状は今みても、文意はあいまいで、誤字等も多い。「愚俗のために伺っておきたい……」などとは一寺の住職のいう文言ではない。あまり学問のある僧侶とも思えない内容である。

この質問状に対し、兩人は再び加藤廉三の助言を求めたらしく、その往復文書が『富士宗学要集』にも掲載されている。これによると、その翌年にかけて、加藤・荒木（当時儀兵衛と称す）連名で妙法寺側と三度にわたって文書による応答が行われている。

しかし、書面によるやりとりではらちが開かないと見たか、妙法寺側は、結局この年の十月十八日、十九日にわたって、離壇を希望するもの全員を妙法寺によびだし、

講演会にかこつけて大勢の僧侶で威圧し、強引に説得してその動きを封じようとしたのである。（ちなみに荒木英一は、前号のとおり、この十月十二日〜十四日まで木屋町二条の自宅に禪師を招き、十六日に帰山するのを見送ったばかりであった。）

この妙法寺での一件は、その知らせを受けた布師の書状（源立寺蔵）に詳しいので、ここではそれを引用することにする。

「……前略……御地の同行衆、当流へ改宗離壇いたしたき旨、たびたび菩提寺へあい頼み候ところ、昨十月十八日には能勢倉垣村妙法寺へ一致の僧・大阪中教院詰め権大講義・日嚴と申すもの派出にて、近辺四、五里にふれ達し、かの妙法寺へ十四か寺の長たる寺院集会上、当門能勢の講頭井上條橘殿はじめ二十軒あまり呼びだし、当門破折の心づもり、十八、十九日両日の説教これあるよしにつき、貴許方（注一）の手配ゆえ当門にても西京加藤廉三殿並びに大阪講中荒木、牧野、田村その他五、六名にて彼の説教中に、忽然とあらわれ、まず最初に荒木清勇殿発言にて、『興門退治のおもむきを承りたし』と申し候ところ、かの日嚴一言の

返答もこれなし。また押問諸難をいたされ、かつまた井上條橘殿の難問、『ここに安置する造仏は無間（地獄）なり』と申すに、さらに返答これなし。一言の返答にも及ばず、口をして鼻のごとくいよいよ閉口に候はば、『改宗勝手たるべき』むね申し入れ、かつこと約義決定にあいなり、事すみのよし。

西京加藤氏も後陣にひかえ、先陣たる荒木の新手に大敵降伏いたされ、実に先陣後陣と合隊にあらざれば、あいなり難く、異体同心ならば軍に負けずと仰せおかれ候。後陣も出陣にあいならず、前陣にて切り破り、当門の大勝利の段、まことに各々方の大奮発、別しては三宝御加護ひとえにありがたきことに存じ候。かつまた、かの日嚴なるもの兩日の説教を一日にてあい止め、尾を巻いて早々あい退き候。なんとも大笑至極、ここも一同あい悦びまかりあり候。なおまた加藤氏の詠まれし速吟には、

吹きおろす富士の嵐の烈しくて

能勢の木葉はちりうせにけり

と。実に面目、さすが後陣ゆえ智仁勇兼備の加藤氏と一入感じいることにござ候。

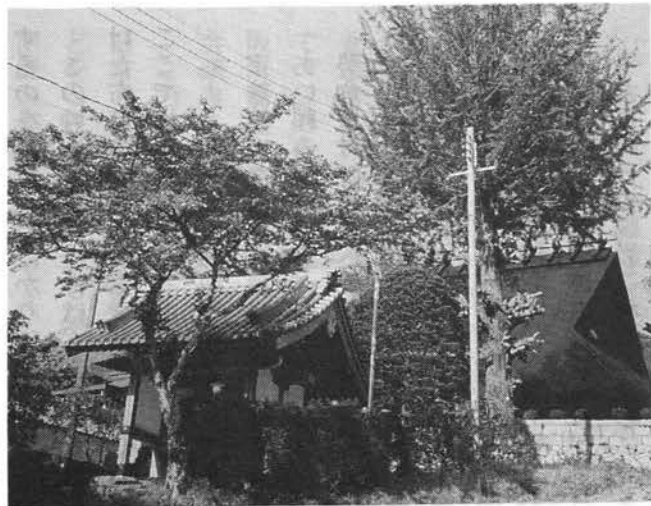
……（以下略）  
布師の流ちょうな筆づかいが、問答の様子をいきいきと写しとっているので、当日の様子がよく分かる。

その日、能勢一帯の主な日蓮宗寺院住職が多数集まって、大阪からは、関西宗務所の大物・浪越日嚴の出張をたのみ、日興門流破折の演説にことよせて、能勢の講衆を一気に説き伏せようと試みた。妙法寺の本堂に参集して待ち受け、いざ演説会を始めようとするや、思いがけず、荒木英一のするとい舌鋒にあつて、思いもよらない展開になり、狼狽して日蓮宗僧侶側の一方的な敗北となつてしまつたという。

多少の誇張はあるのだろうが、それにしても、大勢の僧侶が集まっていたはずなのに、論義にすらならなかつた。すでに僧侶側も荒木や加藤の手強さを知っていたのかもしれない。

もとより日蓮宗僧侶の多くは寺請け制度にあぐらをかいて、生活のために葬祭や祈祷を専らとする者が多く。いま現在でも法義の研鑽はおろか、信心すら疑わしい住職連が多い。はたして、このてんぷら僧侶（コロモだけの僧侶をいう）のような連中

に、強い求道心と深い法門の素養をもつ加藤藤三や荒木英一らに、法論でかなうわけがなかつた。また、社会的にみても有識者層とみなされる倉垣の人々が、主体的な信仰にめざめて、自ら正法を求めているものを、翻意させられるわけもなかつた。



倉垣問答の場となつた妙法寺

この日の一件は当時の新聞にも報道され、能勢地方の評判になつたようである。そのためか、これを契機に新たに入信するものも加わり、倉垣の法華講衆は大いに氣勢があがつたものである。

かくして、確信を深めた二十数軒の法華講衆の人々は、何よりもまず、自分達の帰命依止の道場である新寺建立のために汗を流すこととなった。

ひきつづき応分の募財に尽力した結果、早くも翌年には講中の一人が寄進した栗山の平坦地を切り開き、本妙庵をもうけ、源立寺什宝であった板本尊（日堅上人筆・大塩政之丞授与）と宗祖御影様を御安置申し上げることができた。

その後、井上條橘（広頼房）が出家して御本尊のお給仕に当たるとともに、明治十四年には説教所として正式に大阪府の許可も下り、大倉山広基寺として、小さいながらも次第に荘厳仏具もとのい、日興門流の法燈を輝かすこととなった。

注1. 源立寺住職広正房のこと。

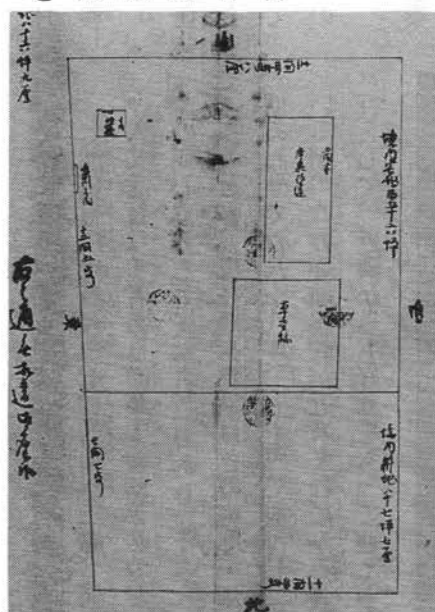
\* 源立寺移転と池田問答

ところで、ここに紹介した布師書状は、源立寺の広正房（富士本智境）に宛てられたものである。倉垣問答のあったこの頃、源立寺の住職に任せられたばかりの広正房は、池田に寺地移転のため、多忙な日々を

送っていた。

池田の講中の発祥は、これより先、維新前後に田村由兵衛（量詮）が北野蓮華寺に帰依するや、明治四年には堺本伝寺の再建に尽力し、ついで明治七年に池田・本町で酒造業を営む酒屋石井たけ家の跡継ぎとなっていた実弟・政七を教化し、さらにその舎弟で池田本養寺の住職だった慈淳房（後に堺本伝寺住職）を改宗帰入させたことが淵源である。

このころ田村・石井・慈淳房（本伝寺）三兄弟の教化によって新田秀賢（広賢）・新田伊三郎父子やその兄弟、佐々木、藤本、古川、秦、奥井、高木らが帰依して、池田には少数ながらもしっかりした講中が育っていたのである。



長柄源立寺の絵図面 (明治七年)

同じころ、長柄薬師堂村にあった源立寺の矢野俊慎房が明治八年七月に逝去したが、後住もなく、従来の檀徒はみな兼務の蓮華寺に所属していたため、無住のまま、荒れるにまかせていた。そこに明治九年になって、府下の無禄・無住・無檀家の寺院は廃止せよとの指令が出て、いよいよ廃寺寸前においこまれてしまった。

これを知った田村由兵衛が、何とか廃寺を免れようと、石井政七と計って池田への移転再建を企て、池田講中の賛同を得て回った。ちょうど池田・槻木町には禪寺の宝相庵跡があつて町内で共有管理しており、これを購入すれば寺地移転許可を得る見通しもついていた。

そこで田村・石井兄弟は、隠尊の露師のお供をして蓮華寺に随侍していた当時十九歳の広正房をくどき落とし、やつとこのことで辞令を受けてもらい、明治十年二月二十四日、源立寺十二代住職として長柄の陋屋に赴任してもらい、ひとまず、廃寺の憂き目を免れたのであった。この時、府下で無住・無檀の寺院が廃止を免れた唯一のケースだったという。

そこで、さっそく移転事業にかかった広

正房は、同年四月に府庁に出願し、十一月に許可、同じく明治十年十一月下旬には移転入仏の法要をおこなっている。

この寺地移転事業に際して、広正房が蓮華寺および住本寺に在勤修行していたこともあって、両講中から物心両面にわたって多くの支援を受けた事が、広正房自筆の『当山由来』にみえている。

「法縁の蓮華寺住職日優師並びに隠居泰雄坊日承師等、おのおの与力し檀家の信施を得て一毫の貪ほりなく安々として一寺を建立す。

時の世話方、大阪には講頭森村平治、居田徳兵衛、田村由兵衛、牧野伊兵衛、虎谷いと、大石武助等なり。西京には加藤廉三並びに荒木儀兵衛（大阪の住人、この時京都に住す）、加藤五兵衛、原田武助、井上政七、桂善七等なり。みなみな同心して分限多少の論なく、信施を請う。この時加藤廉三（法号致要）の作せる一時建立寄付功德の説法本あり、この功他に異なりと称すべし。

荒木儀兵衛・田村由兵衛・石井政七等は源立寺再建に付いては言語に尽くせざる功あり。その他、時の世話人の功おる

そかに思うべからず。

池田村には石井政七、新田伊三郎、同人父秀賢なる者あり、藤本善助等おのこの同心協力して大奉行これあり（注一）このとき、現在地を建家付きの宅地・畑地あわせて百八十八坪、七十円で取得しているが、この寺地移転が近來まれにみる善行として、近隣からも好意をもって迎えら



広正房自筆の「当山由来」

れたようで、五十円を値引きしてくれたものである（注二）。

またこれを吉祥として新たに帰依するものもあり、寺地売買の世話をした寺部金五郎などもこの時に入信している。能勢の講中もこの時から源立寺に所属し、広正房の教化を受けることになったのである。

移転法要をおえた広正房は、二ヶ月ほど

九州から参詣した妙寿尼に源立寺の留守居をたのんで東京方面に折伏弘教にかけたが、その後も、久留米の妙寿尼の布教の応援にかけつけたり、石井政七（後の石井広進房）らとともに縁故をたどっては布教に出向き、めざましい活躍をみせている。川西や神戸・尼崎・丹波篠山にまで教戦がのびつつあった。

地元では新田・佐々木・古川・秦・奥井・山田等が池田講中の中核となって熱心に護法のために尽力していたから、明治十一年二月には仮本堂もでき、四月六日には盛大に入院式を執行し西京・大阪・能勢その他からも多くの参詣があった。

さらにその翌十二年六月には留守居の大野俊清房らを発起人として、小さいながらも立派な本堂が新築されたのであった。これらの事業に荒木英一が応分の財物を御供養していることはいうまでもない。

ところで、この時期の荒木英一もまた、商用でしきりに京・大阪を往復し、時に池田にまで足をのばし、源立寺移転再建にも助力するかたわら、広正房や石井政七とともに、布教・問答等に多くの足跡を残している。

ちよつと寄り道 ⑦

## 諸天のご加護か

伯耆の里 もりたかんどう

「はい、時間です。」

試験官の声と同時に、ああ、これまでか、という絶望的な気分におそわれた。それまで順調だった筆記試験1と2も、これで水泡に帰した。そうわかつたとたん、試験の緊張がとれてしまった。しかし、実技（オペレーション）試験終了時の暗澹たる気分はいまでも忘れない。

三度目の正直、ラストチャンスに一縷の望みをつなぐため、万全のシフトをしたMOT（マイクロソフト・オフィシャル・トレーナー）試験である。それなりのことはした。16回の広島通いもそうだ。視力の衰えを補う意味でメガネを新調したのもそうである。試験前三日間は最後の追

い込み、試験会場（広島のパットさん）に近いホテルでの缶詰もそのひとつである。それらが報われなかった。それにしても、パソコン一式をホテルに送り、フロントで受けとつて部屋で荷をほどこいてお勉強とは、いまだき滑稽でしかない。

こんなときノートパソコンだとスマートだろうが、こんなことが再々あるわけはないからぜいたくは言えない。

MOTの試験で苦しんだところは二つある。まず筆記試験の採点が加減方式ということ。正解の場合はプラス、誤答の場合はマイナスというやり方で、正解が85点でも誤答が15点だと、70点で不合格になる。おそろしい方式である。ふたつめは実技試験の時間が短いことだ。35分間でエクセルやワードの文書を3つ仕上げするには、アクションゲームさながらのスピードが求められる。時間のわりに問題数が多いから、問題を読んだとたん

答えが浮かぶようでないと、キーボードやマウスの操作が間に合わない。知識や操作より敏捷性が問われる。

試験の日、実技問題の最後はワードだった。透かし文字の問題をウォーターマークと勘違いしたためか、1ページの文書がグチャグチャに乱れて2ページになった。ここで、「はい、時間です。」エクセルもできなかったところがあつたから、どう転んでも最悪だった。

帰ってから二十日ほどして、マイクロソフトから通知がきた。あれは落ちた試験だと忪から諦めていたから、合格だといわれても自分の力という気がしない。あれでどうして受かったのか。うれしさと不思議さが交錯する。はじめは試験官の採点ミスか試験官のサジ加減かと疑った。が、やがていつしか、これは諸天のご加護ではなからうか、何らかの励ましではなからうかと思うようになった。

明治十一年六月の布師書状にも、

「田中源吾なるもの牧野宅にて数日問答  
これあるよし、さりながら荒木殿にて充  
分のよし、定めて一言二言には過ぐべか  
らずと冥察いたし候……」

この文中の牧野宅とは、当時蓮華寺講中  
の中心者の一人牧野伊兵衛（号浄実）であ  
り、戦前まで梅田駅前（桜橋にて旅館静観  
楼を営んでいた。この人物もこの後にもし  
ばしば登場することになるが、荒木英一と  
ならぶ強信者であり、肝胆あい照らす同志  
であった。この静観楼で、堅樹流の流れを  
汲む「正法真道社」田中源吾との法論があ  
り、荒木英一が対論することになって、布  
師から全幅の信頼を寄せられていることが  
わかる。

また、英一は、明治十二年四月に露師よ  
りお守り御本尊をいただいているが、その  
授与書きには、

「撰州池田荒木儀兵衛」

と記されているところから、池田町内に暫  
時仮寓していたことが考えられる。広正房  
の依頼で短期間、源立寺の留守をあずかっ  
たものか、あるいは問答等のために出張し  
ていたものであろう。

かくして、これまでの日蓮宗との問答の  
早わかりとして、同年九月には、最初の著  
書『一致破責之事』を執筆し、活版で自費  
出版している。おそらくこれが本宗初の活  
版による教義出版物になると思われる。い  
ち早く新技術による出版を取り入れ、布教  
に活用することなど、いかにも英一の進取  
の精神をものがたるものである。

この他にも、大石寺の雪山文庫には、荒  
木英一自筆の記録『池田件決答二件他』（明  
治前半諸問答）が架蔵されている。これは  
明治十五年頃にまとめた『池田問答記』と  
思われるがつまびらかではない（注3）。

この明治十年代の世相は、全国的に自由  
民権運動がさかんととなり、各地で演説会や  
討論会がさかんに開かれるようになって世  
論が沸き立った時代でもある。まだまだ情  
報や娯楽の乏しい時代であった。各種の新  
聞が発行され、演説会などいづれも盛況を  
呈していたから、当時の問答や演説会もな  
かなか白熱したようだった。

また信教の自由をはじめ社会制度が急速  
に変化し、流動化しはじめていたから、仏  
教系各教団とも深刻な危機意識をもち、教  
義の近代化、教団の近代化に迫られていた。

このよう事情は大石寺派でも同じことで  
あって、少数ではあるが、こうした時代の  
流れをみきわめ、法滅の危機意識をもった  
篤信の僧俗が、活発な弘教を展開するとと  
もに、同様の課題にも取り組んでいたの  
である。そして他教団が衰退し続けるなか、  
熱烈な護法心によって、排仏毀釈の痛手か  
らたちなおり、ようやく衰運を挽回しつづ  
かったといえる。

その先頭には、いつでも露師や妙寿尼・  
広正房、そして在家では荒木英一らの姿が  
あった……。 (つづく)

注1. 文中の加藤廉三の説法本は雪山文庫に  
現存する。

注2. この境内地を中心に、このとき佐野妙  
寿尼が隣接地三十坪を寄進し、その後  
広正房および泰俊明房の丹精による隣  
接地購入により現境内地がなりたつて  
いる。石井政七も畑地を  
寄進している。

注3. 現宗門が秘密主義でガードが固く、法  
主の許可が無くしては誰人も文庫の古書  
を閲覧することすらできない専制的な  
システムであるため、これらの池田滞  
在期の活動をものがたる直接資料を見  
ることができないのは残念である。

【前号訂正—14頁上段 七人の娘—二男六女

長女—四女

次女—三女】



恵日だより

第二十三回全国法華講大会

五月十六日（日）午後一時

新緑のまばゆい五月十六日（日）、大分県別府市のビープラザを会場に、第二十三回全国法華講大会が開催された。

今回は、ご住職はじめ総勢二十一名の参加者は伊丹空港に集合して雨の大阪を出発、午前十時には快晴の大分空港に到着、レンタカーで別府市内に向かった。

近代的でゆったりとした会場には二千五百名の法華講員が全国から参集、開幕を待った。定刻通り開催された大会は、今回新たに選出された正信会議長坂井進道師の所信表明、法華講代表三名の決意発表、青年僧侶抱負・小高慈明

師、講演・近藤済道師と続き、感動のうち閉幕した（詳報は継命新聞に掲載）。その後は、親睦旅行が予定されており、湯布院、黒川温泉を回って、阿蘇山頂に立ち、麓の法輪寺に参詣して空路帰阪した。二泊三日のゆったりとした行程で、参加者は楽しい思い出いっぱい無事帰宅した。

【訃報】

〔箕面地区〕

廣正院妙廉信女

四月二十日寂

俗名 亀井れん之霊

行年九十歳

〔川西地区〕

光清院法徳信士

四月二十五日寂

俗名 佐賀清一之霊

行年七十九歳

〔箕面地区〕

正徳院妙豊信女

五月十三日寂

俗名 篠田トヨ之霊

行年八十八歳

この度、右の方々がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

第二十九回源立寺法華講総会のご案内

来る六月十三日(日)午後一時より、第二十九回源立寺法華講総会が、開催されます。

六月の法華講総会と、十一月の御大会式とは、源立寺の年間二大行事です。毎月の御報恩お講に参詣できない方も、この二つの行事には、お誘い合わせのうえ、ふるってご参加下さい。

今回は、興風談所の山上弘道師に「同一苦」の題で講演いただきます。また、今年から本堂内にイス席も多数設けますので、正座が不得手な方も、安心してご参加下さい。

ご案内・お知らせ

\*婦人部総会のご案内

今年の総会は六月二十三日の水曜日、午前九時に源立寺を観光バスで出発し、明石市の東部に位置する神通寺に参詣いたします。その後は新神戸オリエンタルホテルにて、バイキングの昼食をとり、布引ハーブ園・明石大橋を見学します。なお神通寺は、先の阪神淡路大震災のおりに少なからず被災され、ご住職と講中が一体となって修復復興をなされました。

同じ時に、同じ経験をした源立寺講中としましては、決して他人事と思えない寺院でもあります。

さらに明石海峡大橋も完成して、文字通り四国と本州の橋渡し役をになう地域で、信仰に覚醒運動に精進されているご住職(川井泰円師)からは、貴重なお話が聞けると思います。

定員四十五名まで、あと少し空席がありますので、参加ご希望の方は早めに受付までご連絡下さい。なお、お問い合わせは、副婦人部長の奥原和子・福田光代さんまで、ご連絡下さい。

【水無月詠草】

〔橋本 圓子〕

数少ない 戦争体験詠む 友より

ひとしお夫を 惜しむ弔電

来し方の 愉しきさまのみ 貼られる

吾が家の アルバム くり返し見る

彼岸会に 塔婆捧げて 供養なす

本妙院義信法護居士なり

〔故橋本 義一〕

住職の 案内頂く 雪の佐渡

凍る山路も 心は熱く

打ち続く 苦難も 歎び 越えられし

聖人惚びつつ 塚原に立つ

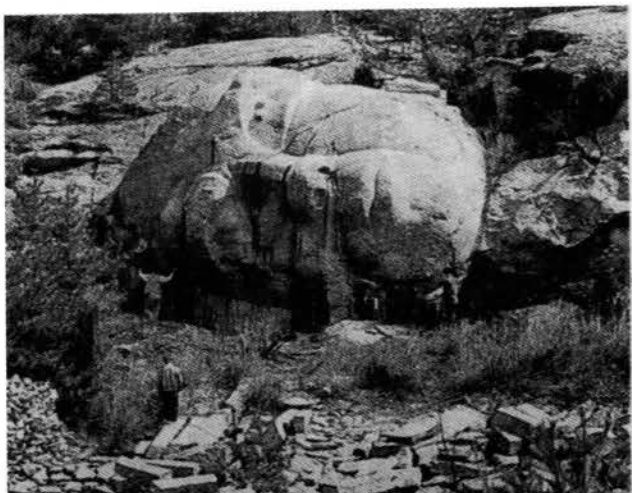
流罪の師を 常随給仕の 日興さま

七百年前 酷寒の佐渡

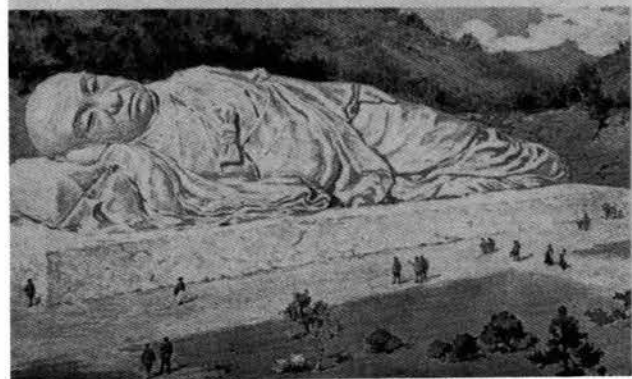




岡山県玉野市の一キロほど沖合の瀬戸内海に、牛ヶ首島（香川県直島町）とい



顔だけ出来上がった巨大な日蓮上人涅槃像＝牛ヶ首島



巨大な日蓮大聖人の涅槃像の顔部分（上）と、完成予想図（山陽新聞）

う無人島が浮かんでいる。この島に顔だけ出来上がった巨大な石像があるそうだ。巨大な花崗岩に彫られた石像の顔の大きさは、長さ十二メートル、高さ八・五メートルもあり、この大きさは奈良東大寺大仏の顔の二倍を越す

れており、その像の由来を記した記録が最近見つかったと、地元の山陽新聞が紹介していた。新聞によると、大正の始めに西尾吉太郎という山陽新聞の創業者と、日露戦争で有名な東郷平八郎元帥らを中心に、島を買い取った西尾が、山頂の巨岩で涅槃像を計画して、日蓮の教えに基づき、国の隆盛を願う場とするため、日蓮宗の信者だった東郷元帥らを発起人に全国組織で募金を呼びかけたもので、完成すれば、

というから、いかに大きな像か。この石像の存在自体が初耳だが、日蓮大聖人の涅槃像といわ

寝姿の全身が七十五メートルにもなるという巨大なものだったようだ。

残念ながら、資金難で作業はストップ。戦後、西尾の娘の嫁ぎ先の会社が再度着手するも、岩に亀裂ができて断念したという。しかし、その後も作業を依頼されていた石工が一人で三十年近く彫り続け、昭和五十七年頃顔だけは完成したそうだ。石工の死後、当然工事は完全にストップしたが、ごく近いところで、それもこんな工事が最近まで人知れず続けられていたことには驚かされた。

釈尊の涅槃像を見たことはあっても、大聖人の涅槃像というのはあまり聞かないし、その像の意味するところもよく知らないが、やはり涅槃の意味する常住、安楽、清浄、不動悟りといったことを表すというのだろうか。

もしそうだとすると、大聖人像といえど博多湾の立像などが有名で、いかにも好戦的なイメージが定着している感があるだけに、軍人の東郷らがあえて涅槃像を計画していたというのなら面白いかもしれない。

何れにせよ、チャンスがあれば彼の島を一度は訪れてみたい気もする。（大谷）

# 六月の行事

- 一日(火) 午後二時 お経日
- 六日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
- 七日(月) 午後二時 広基寺お講
- 十三日(日) 午後一時 第二十九回法華講総会
- 二十三日(水) 午前九時出発 婦人部総会(神通寺参詣)
- 二十七日(日) 午後二時 法華経講義

※六月一日の新聞発送は「単池・服部」が担当です

## 今月の宅お講

- 十七日(木) 午後一時半 旭丘地区(上西栄一宅)
- 十九日(土) 午後一時半 槻木地区(佐久間勝治朗宅)
- 二十六日(土) 午後一時半 服部地区(福元ユキ宅)

## 愛読者の方へお願い

日頃は本誌をご愛読いただきありがとうございます。さてこの度、本誌の郵送について、第三種郵便物の認可を申請することにしました。この認可をうけると①従来三つ折りにして定型郵便物に封入していたものを、そのままのB5形で送れる ②重量制限がなく、増頁が可能 ③郵送料が削減できる、というメリットがあります。

ただし、これにはⅠ・定価を定める、Ⅱ・無料配布数が20%以下、Ⅲ・五百部以上……その他の条件をクリアする必要があるようです。

そのため従来より源立寺法華講以外の方で、無料贈呈の分につきましては、七月号でいったん打ち切りといたします。今後とも継続してご愛読頂ける方には、有料購読に切り替えていただくようお願いいたします。購読料は当面一周年間二千円(送料込み)とし、次回七月号に振り込み紙を同封しますので、その用紙で申込まれた方のみ継続郵送いたします。まことに勝手なお願いですが、本誌発展のためによりしくご協力お願いします。

なお、講中の方には、講費とともに自動引き落としとなっておりますので、従来どおりです。

## 恵日

平成十一年六月号 通巻五十二号  
平成十一年六月一日発行

編集兼  
発行人

菅野憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇〇 源立寺内  
TEL (0727) 511333  
E-Mail: gen@wombat.or.jp  
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAN)